



初代 喜八郎

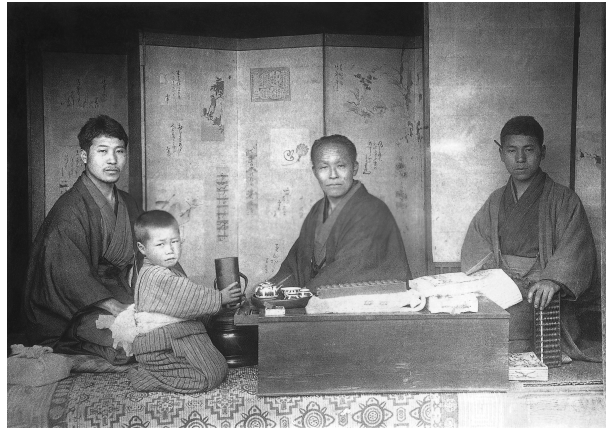
我が家は、飯田市下久堅南原、天龍川の東段丘にある山あいまの小さな洞ほら、その坂道を少し登ったところに建つ。屋号を堤屋つつまやという。これは文永寺にまつわる伝説の「堤」が我が家の近くにあったため、この辺りの小字名を堤田つつまだといい、その堤からの屋号としたと言いう。曾祖父が清中屋きよなかやより分家して興し、父静男（明治二十九年一月二十二日出生）で三代、わたしで四代目となる堤屋は、次のように引き継がれてきた。

第一章 堤屋の歴史

一、初代 喜八郎

宮川の初代は、曾祖父・喜八郎で、本家「清中屋」宮川清助の次男。妻みやを伴って明治元年分家し、本家から洞を少し上ったこの地に宮川家を起たした。みやは、文永寺二天門前の舊家「仲仙道」橋爪豊四郎（現在仲仙道はなくなり、牧野内貞夫さん宅が建

四、養蚕のこと	59
五、前山の植林	60
六、夫・明さんのこと	62
第六章 旅の日記 ヨーロッパ二十日間の旅へ	67
附記 宮井三霊碑について	82
おわりに		



宮川兄弟商店の頃

喜八郎・みやは三男一女の子宝に恵まれ、長男磯太郎が後を継いだ。次男和一は南原三
 枳屋へ養子に入り、また妹愛乃は鼎村の北原家へ嫁した。三男の清一は幼くして死亡（明
 治二十二年三月二十八日没 樸艶童子）している。

磯太郎は、父の喜八郎を手伝い、弟の和一と飯田
 で紙・楮の仲買、貸金などの商売をして成功した
 （「宮川兄弟商店」といったらしいが店のあった場所などは
 不明。『飯田の今昔家並帖』などにも見当たらない）。また
 家では長屋を増築し、糸とりもした。商売では、明
 治三十年中頃には取引先の元結問屋・漉屋の破産に
 よって宮川家も損害を被るといようなこともあっ
 たが、その苦しい中であって磯太郎は、だんだんに
 農地を増し、小作として近隣に貸し付け、小さな地
 主として暮らして来た。家の裏斜面を利用して築山
 のある庭を作ったのも磯太郎の時だと聞いた。そう



みや

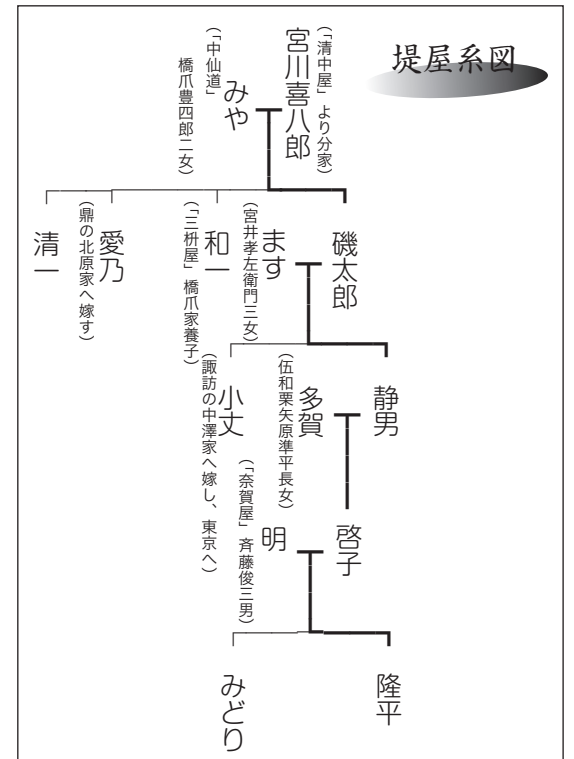
っている）の二女。

喜八郎は紙・楮の仲買、貸金業を営み、相応の財
 をなしていたと思われる。というのも、明治以降、
 竜東の村々にあつて悲願だった天龍川に橋を架ける
 事業は村民有志から募金を集め、失敗を繰り返しな
 がら挑戦し続け、大正六年九月に「南丈六稻荷社
 側」にようやく九代目の吊り橋が完成するが、これ

までも募金を募っては架橋し失敗を繰り返してきたこの架橋事業に最後まで資金的な協力を
 をし続けた橋爪定次郎（三枳屋）、青島常作（白山）と並んで、喜八郎（堤屋）の名前が確
 認（『南原橋沿革史』）できるからだ。この橋は南原の棟梁高橋浅之助の手になる「東洋一
 の高架橋」として有名だが架設後修理を加え、大正六年十代目の橋に架け替えられるま
 で、最長の十八年間持ちこたえた。

喜八郎は天保十三年生まれ、昭和二年十一月八日に亡くなっている。戒名は是空院日夏
 耽晃映心居士。

また、妻のみやは弘化四年生まれ、夫より早く明治四十三年一月七日に没し、戒名は淳
 信院賢操烈誠大姉という。



悦道和尚様が聞いて「証文が堤屋の金庫に入れてある筈だ」とおっしゃったことあったが、今、家には金庫もないので探しようもない。喜八郎や磯太郎の頃にはあったのだろうか。こうした仲人になったり、前述のように架橋の資金を拠出しているところをみると、当時、村内では相応の実力者であったのだろうか。磯太郎は三十七歳で没した（明治四十三年四月七日 萬縁院春嶽芬馨居士）が、若くして亡くなったのが悔やまれる。

妻ますは、下久堅小林美蔵の名家、宮井幸左衛門（四代目）の娘。兄一人、姉二人、弟二人の六人姉妹の三女。父幸左衛門は下久堅郵便局の祖で、財あり、文永寺檀徒として文永寺に貢献、寺子屋も経営した。ますは、前述のように三十五歳の時、夫に先立たれた後、舅の喜八郎が中風で長患いしたので、介護をしながら米作り・養蚕などもして家計を守り苦勞を重ねた。我慢強く献身的な「明治の嫁」であった。ますは、夫、舅亡き後、さらに昭和十四年に長男静男も失い、嫁の多賀、孫の啓子と女三代の日々を暮らし、昭和四十三年三月十四日に九十三歳で亡くなった。院殿の戒名（昭和四十三年三月十四日没 積壽院淑徳芳室大姉）を受けている。宮井家については、巻末の附記「宮井三霊碑」の項で改めて触れたいと思う。

三、三代 静男

三代目は父の静男である。磯太郎・ますの長男。下に妹の小丈こじょうがいる。小丈は諏訪市豊田の士族、中澤家の次男で、東京本所で海苔・茶の間屋を営む正亮に嫁いだ。

父の静男は明治四十三年四月旧制飯田中学へ合格した。その同じ月に、祖父磯太郎が亡くなっている。当時の飯田中学は旧制中学で、一学年東中西の三クラス一〇人で、父は

いえば磯太郎の代に、屋号「城録」青島家が文永寺の上の土地に家を建てることになり、当時の文永寺の弘道和尚様から「寺の上に建つのだから二階にはしないように（寺より高くならないように）」という申し入れがあり、磯太郎が仲人になって文永寺と青島家が証文を交わし、その証文を堤屋に預けた——という話を、生前弘道和尚様から当代の



尚志社の東海道無銭旅行（大正3年3月）

東組。同年年には、西澤寛志（後に西澤病院長）・市村
 奨（後に山本農協組合長）・伊藤誠一（後に伊賀良村
 長）・小鹽完次（日本禁酒同盟理事）・片山均（後に伊賀
 良村長）・松島八郎（後に下伊那教育会長）・伊藤高一
 郎（後に天龍社会長）などの俊英たちがいた。今の中学
 高校と違って落第もあり、また学費が続かず一割ほ
 どが退学していく時代であり、旧制中学以上はいわ
 ば一部選良エリートのための教育と目されていた。父の遺品
 の中に明治四十四年度（二年生）と四十五年度（二年
 生）の「長野県立飯田中学校学年評点表」があるが、
 父はそうした俊英たちに伍して上位の成績をあげて
 いたようだ。

気丈な祖母まずは、飯田女学校（現風越高校）を卒業した嫁入り前の父の妹小丈と共に、
 人手を頼みながらも、一生懸命蚕を飼い、父の中学、大学、またその後の勉学の学資の足
 しにしたらしい。だからこそ、祖母は大黒柱を失った家計をなんとかやりくりして、父を
 中央大学法学部、更に上智大学へと学ばせたのである。祖母の期待が窺える。

父は法律を学ぶため、中央大学からさらに上智大学に進んだが、折悪しく肺結核を患っ
 た。当時特效薬ストレプトマイシン（現在では耐性獲得の危険があるため単剤での治療は行わ
 ず、イソニアジド、リファンピシン、ピラジナミド、エタンブトール）はまだ発見されておらず、
 労咳と呼ばれ効果的治療はなかった。父は弁護士になりたかったのだという。しかし大学
 時代に発病した結核が治りきらず、転地療養を勧められるまま父は、学業を断念し、八丈
 島、更に小笠原群島で療養を重ねたが本復が果たせず、故郷に戻り、母と結婚した。いつ
 重篤化するかわからない病身を抱えながらも、生来の研究熱心で農業に精を出した。蚕の
 石灰育の普及などもその一例である。大古屋裏五郎さ屋敷で小林叔父と大がかりに鶏舎を
 建て養鶏もしたことがあったと聞いたことがある。父は昭和十四年十月五日、四十三歳で没
 した。戒名は康清院聴智了達居士。

母の多賀は、伍和村栗矢の原家より宮川静男に嫁した。六人兄弟の長女。

生家は、下伊那郡阿智村伍和栗矢ごかの原家（終廼舎）である。現在は我が家から車で三十
 分くらいの距離、中央自動車道に添う阿智川温泉郷近くにある。母の弟昌二の代で九代
 目。母の曾祖父は平田派学者（没後門人）、実行教を説いたこの地方で有名な原九右衛門
 重興翁、恩田井水を引き、伍和小学校校歌を作詞した人である。画家富岡鐵齋や政界黒田
 清隆始め多くの文人墨客ぼっかくと交際あった。九右衛門翁が住まわっていた本棟の大きな家に

は、昔百姓一揆の時なだれ込んできた百姓の一人が付けた刀傷のある大黒柱や、床の間に懸けられてい軸には、今でも覚えているが九右衛門翁米寿の祝いに寄せられたという「信濃川かれぬ流れをためしにいや長からむ君が玉の緒」という黒田清隆の書、また名士の色紙・短冊・扇面などが貼られた大きな襖など——栗矢の歴史を感じさせる文物があちこちにあった。しかし、長男稲太郎の代には三男桑四郎が県会議長を務めるなど政界に進出したり、また自身の普請好きもあって蔵や長屋を建て多額の資金を使った。その息子で、村長を務めた母の親の準平の代には、その妻茂の早死にもあり、小作地の整理、幾つもあった蔵や長屋の取り壊し、書画骨董を手放すなど原家の生活も様変わりしていた。中でも親交のあった鐵齋が九右衛門翁の米寿に「心血を注いで画いた」と添え書きのあった「扶桑神境之図」を手放すときは本当に悲しかったと母が幾度となく口にしていたのを覚えてる。

母は、結婚後十年、三十五歳の時、若くして主人の静男を亡くした。その後は、義母と娘（わたし 六歳）三人の生活が続くが、その苦労は察するにあまりある。経済のことは三軒屋へ養子に行った和一大叔父に相談に乗ってもらい、農事は千広さんにならなまて手伝ってもらった。

母は平成七年十月二十日に逝った。戒名を康澄院総芳隆室大姉という。

四、四代 啓子

静男と多賀には男の子が授からなかった。そこで一人娘の啓子（わたし）に、知久平奈賀屋齊藤家三男の明さんを迎えた。齊藤家では長男は幼少に亡くなられ、次男利八さんが後継者で、姉のすみさんはすぐ下の泰座青島家へ嫁している。明さんは大学卒業後、飯伊の中・高校で教鞭をとった。退職後の平成二十年七十九歳で没した。